

2 ヘンリー王の狩り

ヘンリー王はウォルサムの森に立った
明るい五月の朝のこと
キリストの生誕から時経て
千五百三十六年目のこと

ヘンリー王はウォルサムの森に立った 5
新緑萌え出る 光と影の中
家来や獵犬^{いぬ}たちは 今か今かと気もそぞろ
だが王は 前足で地面を叩く馬に^{また}跨がろうとしない

「陛下は何をお悩みで
不機嫌そうなお様子で行ったり来たり 10
どんな獲物を追われる時も
こんなにお足が進まないことなどなかったのに」

歩いては立ち止まり 歩いては向きを変え
時折 何やらぶつぶつ^{ひと}独り言
ベルトを締め直したり 顎髭^{ひげ}をグイと引いたり 15
だが ひと言も発しない

二匹ひと組に繋がれた^{いぬ}獵犬たちは 辺りを嗅ぎ回り
あるいは 草地の上にゴロリと横たわり
獵犬番たちは馬の腹帯^{はらおび}や馬勒^{うまぐし}を弄りながら
恐々^{こわごわ}と王を盗み見ていた 20

若い^{ていしん}廷臣たちは 仲間内で
小声で笑い おしゃべりしていた
あるいは 花をつけた山査子^{さんざし}の枝を
何食わぬ顔で折ったりしていた

ヘンリー王は倒れたオークの木に腰をかけ 25
いつもに増して暗く異様な目付きをしていた
額に皺を寄せ 唇を噛んでいた
そういう時は危険であった

ローマ教皇と皇帝のことを考えているのか
彼らを否定し 逆らったことを 30
それとも ^{おの}己が足元の裏切り者たちが
陰謀を企んでいるのか ならば 奴らに災いあれ

突然 ^{みなみかぜ}南風に乗って
遠くから でも はっきりと
一発の大砲の音が聞こえ 35
イングランド王は飛び上がった

「我が馬を」 王は叫ぶ 「さあ ^{いぬ}獵犬どもを放て」
皆のものが一斉に馬に^{また}跨がった
一頭の牝鹿^{めじか}を目撃 人馬と^{いぬ}獵犬一斉に
怒り狂った悪魔のごとく襲いかかった 40

^{めじか}牝鹿は素早く木立や空き地を逃げ回り
それに負けじと追っ手が追跡
森中の四方八方から
狩する者たちの角笛と叫び声

^{いぬ}獵犬たちが一斉に道を空け 45
馬の乗り手たちが前に出た
五月に^{めじか}牝鹿を殺すは容易きこと
そばに子鹿がいなければ

恰幅よくずっしりした王は
力強い馬に^{また}跨がり 50
一陣の突風の如く
^{ぐんよう}群葉茂る林を抜けた

家来たちがさっと道を空け
王は全力で 雄叫びあげて疾走した
長らく苛々と待たされていた馬も 55
今こそ威勢よく 鼻息荒く嬉々としていた

^{めじか}牝鹿は仕留められ 皆の者は
大瓶のワインとコーニッシュパイに舌鼓を打った
「聖ジョージよ 守り給え 気高き^{きみ}主君を
時には^{げき}激しやすく 性急過ぎることもある^{きみ}主君を」 60

ノーフォーク卿以外には 知るものはあまり無かった

なぜ 遠くの一発の銃声で
遠くの唸るような大砲の音で
突然鹿狩りが始まったかを

先程まで憂鬱で不機嫌そうだった国王閣下が
なぜ かくも楽しげになったかを 65
城の塔から轟いた大砲の音は
美しきアン・ブーリンの首が落ちた合図であった

ヘンリーがいつも口づけしていたアンの首は
血染めの斧で切り落とされた 70
二人の間の幼い娘エリザベスに
アンが会うことは二度と無い

国王は愉快げに西の方に駆け去る
ほくそ笑みはいや増すばかり
あした おの 明日は己が婚礼の日 75
美しきジェーン・シーモアと結ばれる日

ひ 陽は傾き 野鳥の鳴き声が
エッピングの森に こだま 飴 する
木立から空き地へ 光と影を縫って
めじか 牝鹿の一団が飛び跳ねている 80

(山中光義訳)